

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991000143		
法人名	有限会社ワイズプランニング		
事業所名	グループホームこころ親園(東西ユニット共通)		
所在地	324-0044 栃木県大田原市親園3003		
自己評価作成日	平成29年9月28日	評価結果市町村受理日	平成30年3月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	平成29年10月27日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ご利用者様のADLや身体的な機能低下が著しい中、看護師が常駐し緊急時にも素早い対応ができています。ご利用者様が重度化してきている今、ご家族と相談し主治医との連携を取り、施設で自宅のように最期をむかえたいというケースも増えてきています。
ご利用者様とご家族にとってのベストとは何かを見出すために、コミュニケーションを大切にしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所には独自に作った、「えがお」「まごころ」「その人らしさ」という「こころ親園 私たちの理念」があり、法人の経営理念と共に、職員一人ひとりが利用者との関わりの中でこれらの理念を念頭において、日々のケアの実践に努めている。食堂兼居間からは、利用者の会話と職員の元気な声が聞こえ、全体的に明るい雰囲気がある。夏祭りには地域のボランティアが協力したり、地元の小学校の合唱部が歌を披露するなど、運営推進会議の地元代表を中心に地域とのつながりも活発になってきている。看護師が配置され、家族の協力のもと、地域の医師など医療と連携して看取りが行われている。職員は最初の頃は不安な気持ちもあったようだが、老衰による看取りを自然に受け入れるようになってきている。管理者と職員の関係も良く、利用者のケアなど職員からの意見・提案も多く、利用者・家族にとって‘ベスト’な事業所運営が行われている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員全員が「ころ親園 私たちの理念」の唱和を実施している。その後、理念に沿ったスピーチを行い理念の理解と実施に心掛けている。事業所独自の理念を作り、壁に掲げ一人ひとり実践に努めている。	事業所には独自に作った「ころ親園 私たちの理念」があり、「えがお」「まごころ」「その人らしさ」という言葉を、事業所の壁に掲げている。また、法人の経営理念もあり、朝の申し送りの時に唱和している。職員一人ひとりが利用者との関わりの中でこれらの理念を念頭において、日々のケアの実践に努めている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の活動や行事に積極的に参加している。自治会の総会や文化祭、地域のコミュニティでもある「ほほえみセンター」の方たちによるフラダンスやフォークダンスなどもボランティアで来所していただいて、茶話会や夏祭りなどに参加していただいている。	事業所の夏祭りには地元のボランティアの方が参加して、フラダンス、フォークダンス、手品などを披露してくれる。近所の方が夏祭りの前に庭の草取りを手伝ってくれたり、散歩で通った人が事業所に立ち寄りたりもする。地元小学校の合唱部の子どもたち50人が来所して歌を披露してくれるなど、地域との交流も活発になっている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域包括と認知症サポーター養成講座に参加し、地域の学校や施設を廻り地域の方々に認知症への理解や知識を得ていただいている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度開催し、市職員・地域の代表の方・ご利用者様のご家族様に参加を頂き、活動報告や施設の現状をフリートークにて行っている。ご利用者様の参加も行っている。時々には駐在所の警察官の参加もあり親園の防犯の話も伺ったり、徘徊者の見守りなどもお願いしている。	運営推進会議は、家族・利用者、地域から自治会長・民生委員、市の担当者や地域包括支援センターの職員などが参加し、年6回開催されている。利用者も、年数回は参加している。会議では、地域代表の人にボランティアを紹介してもらったり、徘徊者の見守りの協力をお願いしたり、災害時の協力依頼などを行っている。防災備蓄品の備蓄状況を聞かれるなど、具体的で活発な意見交換も行われている。	徘徊者の見守りや災害時の応援など、地域自治会へは以前から協力要請を行ってきた。今後は、例えば火災時に事業所の外に避難した利用者の見守りなど、より具体的な内容について協力依頼することも必要と思われる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	定期的な会議(ケアマネ協)や研修に可能な範囲で参加して情報交換や相談をしている。	市の担当者は運営推進会議に毎回参加して情報を提供し、グループホームの運営状況などについて意見交換を行なっている。事業所は利用者に関して相談するなど、市の担当者とは協力関係が築かれている。また、市が事務局となっている市地域医療福祉連絡会主催の研修会が開かれており、可能な範囲でこれに参加している。		

グループホーム ころ親園(東西ユニット共通)

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に社内研修や社外研修に参加して、職員の個々の理解を深め意識の向上に努めている。	月1回の全体会議の後に勉強会を行い、身体拘束をしないケアについても学習している。「虐待の芽チェックリスト」をトイレに貼ったり、職員に配布するなどして注意喚起している。相応しくない言葉づかいに関しては、その都度注意したり、個別面談の時に注意したりしている。玄関は基本的には施錠していないが、夕方の落ち着いた時間帯に一時的に施錠する時もある。	外部研修への参加や全体会での勉強会などの内部研修を行っているが、今後は計画的に職員を育成することも必要と思われる。外部研修や職場研修を充実し、職員のさらなる向上を目指すことを期待する。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	社内研修や外部研修への参加で、正しい理解に努めている。虐待への「自己チェック表」を活用し、虐待の早期発見に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部講師による勉強会や、外部研修に参加している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約締結以前より丁寧な説明を行い、質問等もその場で対応している。 利用中の入院時や解約時にもご家族様と面談し説明等を行い、納得・ご理解を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご利用者様個々にスタッフの担当者を決め、居室の整理整頓などを一緒に行ったり、月に一度ご家族様に向けて担当スタッフがご便りを書いている。ご利用者様とのコミュニケーションを密に行い、情報収集に努めている。	それぞれの利用者には担当職員が決められており、衣替えや居室の整理を利用者と一緒に行ったりして信頼関係を築いている。毎月、家族には請求書と共に利用者の状況を書いたお便りを、イベント時の写真なども添えて送っている。家族は、頻繁に来訪する家族、ほとんど来ない家族と様々だが、来訪時や電話で意見や要望を聞き、運営に反映している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的に職員の全体会議を開催し、意見を聞く場を設け、必要に応じて協議を行い、代表者・管理者は意見や提案を出来る限り運営に反映する姿勢を維持している。	勤務のために参加できない職員を除いて原則全参加の全体会議を月一回開催し、職員の意見や提案を聞いている。不定期ではあるが、全体会議の後に新規利用者に関するカンファレンス会議も開催し、職員の意見等を聞くこともある。事業所は、会議以外の場でも日常的に意見を交わすなど職員にとって意見を言いやすい職場であり、職員の提案でベットから落ちる危険がある利用者に対して床にヨガマットを敷くなどの対応をしたこともある。	

グループホーム ころ親園(東西ユニット共通)

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	キャリアパスを設定し、職員個々の状況に応じて、その内容の説明と今後の課題等を提示し、やりがいや向上心を持って働けるよう努めている。処遇改善交付金が反映された給料日後に、個人面談を実施し努力を労い今後の課題なども話し合っている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は、職員と定期的に面談を実施し現状の悩みや仕事への取り組みなどを話し合い、職員のスキルアップを図っている。また、資格取得の希望時には、随時相談にのり後押しを行っている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣の事業所と交流を持ち職員同士の行き来もある。包括支援センターの職員に外部講師を依頼し勉強会を実施している。(認知症について)			
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前より、担当ケアマネ等から情報を得て本人の立場に立った実調を心掛けている。入居後は職員の担当を決め、ご利用者様の理解に努め、得た情報などは共有してアセスメントなどに反映している。また、過去のサービス利用状況なども確認し、本人の心配や入居に対しての不安や希望にも耳を傾けている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所申込段階から施設見学や施設の情報を発信している。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所時、ご本人様やご家族様にアセスメントを丁寧に行い、計画に反映している。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	心掛けているが、一方的な介護になりやすい。そのような中でも趣味や個人的に外出希望時などは、その都度対応し楽しみを作っている。(将棋や買い物など)			

グループホーム ころ親園(東西ユニット共通)

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	施設という閉ざされたイメージを払拭する為に、小さな情報でもご家族様と共有できるように、定期的にスタッフが生活の様子を手紙に書いたり、管理者が必要に応じて電話等で随時報告を行っている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	住み慣れた地域の友人・知人等の施設への面会、並びに自宅への電話は自由にできる環境づくりをしている。	友人や近所の知人など来訪者は多い。来訪者にはゆっくり話ができるように居室に案内したり、椅子やお茶を出したりしている。家族に電話したい利用者に対して、サポートをすることもある。ケーキが食べたいという利用者に対して、職員が付き添ってケーキを買いに行くこともある。盆と正月に2~3日家に帰ったり、馴染みの美容室に家族が連れて行く利用者もいる。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご利用様一人ひとりの性格・趣味相性等を把握し、ホール内での席やレクリエーションへの声かけなどは、日々のスタッフ同士の情報を共有・考慮したうえでやっている。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	地域に根ざしたサービスの提供で総合的に関わり、退去後の経過等も時々電話等で確認するよう心掛けている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメントを充実することで心の変化等の把握に努めている。	利用者の思いや意向に沿ったケアに努めており、例えば、冷蔵庫が買いたいという利用者に職員が付き添って買い物にでかけることもある。意向の把握が困難な場合は、日頃の会話の中や、以前の話し、家族の話などから推察して対応している。事業所理念にある「その人らしさ」に添ったケアを実践するために、業務を見直して、利用者とかかわる時間を増やし、本人本位のケアに努めている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントが充実するように、本人・家族と情報交換を密に行っている。			

グループホーム ころ親園(東西ユニット共通)

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の観察をスタッフ個々が行い、変化等を見逃さずに申し送り等で情報共有し、心身状態の把握に努めている。特に、体調の変化は定時のバイタル測定等で早期発見に努めている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成は、ご利用様を担当割し、担当になったスタッフ中心でカンファレンスを実施している。本人の課題やケアについては担当者会議をもって作成している。ご家族様が訪問した折等に本人の希望等を伝え、併せてご家族様からの希望も聞いている。	家族の意見・要望は、来訪時や電話等で聞きとり、本人からは普段の会話の中で聞きとっている。利用者それぞれの担当職員を中心に日中の空いた時間に担当者会議を開き、日々の状況については申し送りノートに気付いた点を書いて情報を集積している。これらを元に、計画作成担当者がその人らしさを常に頭に置き本人の意向の実現を目指して介護計画を作成している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個々の情報は個別にファイリングし誰が見ても理解し易くすることで情報を共有している。(バイタル・食事摂取量・入浴・排泄・その他日中夜間の生活の様子等)			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人やご家族様の身体的・精神的な変化に合わせ必要に応じ、サービスの見直し・変更を心掛けている。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議の参加依頼をすることで、地域の方々との関わりを持ち、その関係の方々から協力や指導を頂いている。さらに、民生委員や傾聴ボランティアの方の積極的な協力・近所の方々の行事参加も確立しつつある。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的に受診はご家族様にお願いし、連絡を密にして情報の共有を行い、突然の体調変化にはご家族様の了承を得て協力医の往診等を行っている。必要に応じては管理者又は看護師の同行受診を行うことで、ご利用者様の日常の体調にかかわる情報を提供している。	利用者の多くは事業所から約2kmの所にある協力医をかかりつけ医としており、月2回の訪問診療をお願いしている。緊急時には昼夜往診可能でいつでも相談できる心強い存在である。協力医以外を主治医としている場合は、原則家族の付き添いで受診しているが、利用者の急変時や症状によっては管理者等が同行し症状を伝えることもある。受診結果や薬の変更等については、各ユニットにある申し送りノートに必ず記入し、毎日全職員がチェックすることを義務付けている。		

グループホーム ころ親園(東西ユニット共通)

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設内看護師と情報を共有し看護師が往診時のDrの対応やご家族様同行の受診の際も情報提供を行っている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	退院時の拡大カンファレンスに参加している。退院後の介護計画書などを送付している。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状況に応じてご家族様・主治医とターミナルも見据えて話し合いを行い方向性を決めチーム支援に取り組んでいる。	入居時に、重度化した場合について、点滴は可能だが、胃瘻や経管栄養などの医療的処置が必要になればグループホームでは対応できないことを家族に説明している。グループホームで看取りをするとは表明していないが、通常の高齢者には、かかりつけ医と相談しながら家族の気持ちに寄り添って看取りをしている。すでに今年度は、東西両ユニットで4人の利用者を看取った実績があり、職員は自然に看取りを受け入れる気持ちになっている。希望すればソファーなどを使い、居室に家族が泊まり最期の時間を一緒に過ごすことも可能である。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	施設内勉強会を実施している。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	非常時や災害時に備え避難訓練を全職員で実施し、地域の避難場所やルートの確認も行っている。同時に、自治会や近所の方にも声をかけ協力を得られるようお願いしている。	消防署の立会いのもと夜間想定も含めて年2回の消防・避難訓練を実施し、その都度今後の課題等を全体会議で共有している。消火器は職員全員が使用できるようにしており、出火原因にもなる漏電を防ぐために掃除当番が定期的にプラグの掃除をしている。また火災などの災害時には近所の方に協力してもらえよう自治会長を通してお願いをしている。寒い時期の停電に備え電池式の灯油ストーブを所有している。災害用備蓄品は、消費期限の問題があり現在検討中である。	消防署立会いの年2回の避難訓練のほか、消防署から指摘された火災発見時には大きな声を出すことや、避難完了までの時間短縮の課題改善のために、事業所独自で避難訓練を実施することが望まれる。また、全職員がAEDを使用できるようにするための機会を持つこと、非常時の持ち出し書類を整理しておくことを提案したい。	

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	管理者は、職員の気になる言葉遣いなど耳にした時など必要に応じて個人面談を実施し意識や対応の向上を図っている。		利用者の誇りやプライバシーを損なわないように利用者の目線に合わせて気持ちに寄り添うようにしている。管理者が職員の大きな声や言葉のかけ方について気になる時は、その都度注意を促している。トイレ誘導時には耳元で小さな声で話しかけたり、オムツ交換時にはドアを閉めて居室で行うようにしている。入居時には、家族にプライバシー保護の取り組みを書面を見せながら説明をしている。書類の保管場所である事務所には、夜間鍵をかけて、職員以外の者が書類を見たり持ち出したりしないようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	スタッフの押し付けにならないように心掛けている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スタッフ一人ひとりがケアプランの理解に努め、日々の生活の中でご利用者様個人が尊重されるように心掛けている。ホールに長く滞在しているのではなくご利用者様本人の意思で居室に戻ったりできる環境を作るように声掛けなどを行っている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご利用者様の志向の把握に努め、更衣などはご自分で決定してもらい、不都合のある時のみの支援を心掛けている。(必要以上の手出しはしない)			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好み・摂取可能な食物などをリサーチして、楽しんで食べられる食事を心掛けている。時には、リクエストに応じて外食会も計画実行し、希望があればご利用者様のお小遣いで食物なども購入している。		食事は3食外注しているが、ご飯と朝夕の味噌汁は事業所のキッチンで作っている。噛む力や飲み込む力が弱くなってきている人にはソフト食(やわらか食・軟菜食)を利用している。また利用者の好き嫌いに応じて個々に対応している。利用者は、おやつの手作りや、週1回のパンの販売で好きなパンを買うのを楽しみにしている。時々利用者の希望を聞きながら出前を取ったり、職員がキッチンで天丼を作ったりして食事のメリハリをつけている。箸、湯飲み、茶碗などは自分専用のもを使用している。	

グループホーム ころ親園(東西ユニット共通)

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食材宅配サービスの利用で栄養のバランスやメニューにバラエティを持たせている。水分量の確保は、お茶の時間に限らず日に何度も提供している。水分チェック表でも一日の水分量の把握を行っている。必要に応じて、ソフト食や補助食なども考慮している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自立しているご利用者様には声掛けを、誘導の必要があるご利用者様は出来ないところだけの支援を行っている。最終的な確認作業を行い、清潔の保持を行っている。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定時誘導し排泄パターンを把握し、「失敗」しないという自信を持っていただくように努めている。立位が難しいご利用者様でも二人体制で可能な限りトイレにて排泄を行っている。	時間を決めてトイレ誘導し、利用者の排泄パターンを把握しながら個々に対応している。オムツの人でもトイレでの排泄を試みており、立位が困難な人も職員2人で支えて対応する場合もある。入院時にオムツになっていても、退院後はリハビリパンツに改善できるように支援している。夜間はベッド下にセンサーマットを敷き、職員がトイレへ誘導する場合もある。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事のメニューは野菜が多く食物繊維の摂取が出来ている。毎朝ヨーグルトを摂取し10時のお茶にはカフェオレや便秘気味のご利用者様には冷たい牛乳を飲んでもらうなど乳製品を提供している。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	定期的入浴は決めているが、本人の希望により午前・午後・曜日の変更は可能である。	入浴は週2回を原則としている。同性介助、時間帯、湯温等、利用者の希望にできるだけ沿えるように配慮している。事故がない様に細心の注意を払い、入浴時に利用者の体にあざがないかよく確認し、あざがある時は原因を追究し記録に残している。皮膚疾患のある人には肌の様子をみながら毎日シャワーを行い、入浴困難な利用者には足浴やシャワーで対応している。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活習慣を把握し、状況に応じた声掛けや誘導を行っている。また、居室の温度設定に気を配るなど環境づくりにも心掛けている。			

グループホーム ころ親園(東西ユニット共通)

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ファイルに服薬の項目を設け閲覧可能になっている。通院等で服薬変更等がある場合にも職員全員で情報の共有をしている。(申し送りノート)その後の様子観察も呼び掛けている。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴等を参考にして、草花の生育・趣味の手芸等ができる環境を作るよう努めている。また、材料購入も一緒に行き楽しんでいる。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候・体調に考慮し、スタッフとマンツーマンまたは少人数での施設周辺の散歩等を行っている。少なくとも月に一度は、ドライブや外食会を計画実行している。しかしながら、ご家族様や地域の方々を巻き込んだ外出行事は出来ていない。	一人ひとりの希望に沿って、施設の周りを散歩したり、職員と一緒に近所の店に洋服や菓子などの買い物に出かけたりしている。家族と定期的にお昼を食べに行ったり、馴染みの美容院に出かける利用者もいる。職員は定期的に利用者の希望を聞き、また希望を言えない人には意向をくみとり、好みや体調に配慮して、花見や紅葉狩り、美術館、外食等に出かけて楽しんでいる。出かけられない人には、食事をテイクアウトすることもある。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族様よりお小遣いを預かり、ここに財布を作り、買い物を計画したりしている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望に応じ、制限なく随時手紙の投函をするなどして支援したり、電話はご自身でかけていただいている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間はレクリエーション等でご利用者様と一緒に季節感あふれる装飾を製作し環境を整えている。太陽の光やテレビの音などに対してはその都度ご利用者様に尋ね対応している。	東西ユニットの共有スペースにもなっている居間には、ソファ、テーブル、椅子やテレビ等を設置し、利用者はそれぞれが好きな場所でくつろいでいる。キッチンも居間を見渡せる場所に位置し、職員は利用者の様子を見ながら調理している。利用者同士がトラブルにならないよう相性を見ながら座る場所等に気を配っている。居間の一角にある畳のスペースは、昼寝をしたり、洗濯物を利用者と一緒にとたんだりする場所になっている。廊下の壁にはイベント時に写した利用者の写真や、職員と利用者と一緒に作った作品などが飾られていて暖かい雰囲気になっている。		

グループホーム ころ親園(東西ユニット共通)

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブルの配置やソファ・椅子など必要に応じ変更し、また、畳コーナーにはコタツなども配置し、その日の気分で居場所を各々選べる環境を整えている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時、ご本人・ご家族様と相談し、新品ではなく使い慣れた家具等を用意して頂いている。その後は随時必要なものをご本人の意思にてご家族様に調達してもらっている。	各部屋の入り口には写真が貼ってあるボードが飾ってあり、誰の部屋かすぐ分かるようにしている。全室がフローリングでクローゼットが作り付けられているが、畳を敷いて布団を使用している利用者もいる。部屋は箆笥、位牌、冷蔵庫等も持ち込まれ、利用者それぞれの想いが表れている。ナースコールが完備しているので、昼間だけでなく夜間時の事故防止などにつながっている。各室に温湿度計を置き、職員が部屋の様子を見ながらインフルエンザや風邪予防のために濡れたバスタオルを掛けるなどして乾燥を防いでいる。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりの取り付けやバリアフリーにしたり、看板を設置することで、自力での移動が可能になり、自立に向けた生活が出来るような環境整備に努めている。			